

の土台で議論するための工夫がおこなわれた。年に数回開催された研究会や、テキスタイルの生産現場における共同調査（ブータン、インドネシアのティモール島、沖縄県）において議論は深められた。この種の論文集は、共同研究の場を作り、成果までまとめあげる研究代表者（编者）の手腕なくしては実現しない。そのため、この本は共同研究の方法や成果の出し方についても示唆を与えてくれる。

日本は、手仕事によるテキスタイル生産の豊かな伝統を継続させている世界にもまれな国である。また、テキスタイルの愛好家が多いため、アジアのテキスタイルにとってグローバルな連関をもつ市場のひとつである。海外において日本の文化人類学者を中心としたテキスタイル研究に対する関心は非常に高いため、英語で出版されたことの意義は大きい。

#### <注>

1) 科学研究費基盤研究 (A) (一般) 「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」平成26-29年度 (代表 中谷文美) (課題番号26244053)。

### 山縣良和+ writtinafterwards 企画・構成 『アイデア No.390 writtinafterwards 装綴』

誠文堂新光社、2020年刊  
216頁、2829円+税

国際ファッション専門職大学  
平野 大

今回、雑誌『アイデア』を企画・構成したのは、デザイナーの山縣良和である。山縣

は、セントラル・セント・マーチンを卒業後、writtinafterwards を設立し、以後精力的にクリエイション活動を行っている。また2008年には「ここのがっこう」を立ち上げ、数多くの若手クリエイターたちを輩出している。

本誌の編集は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下の時期に行われた。そのこともあり、本誌で山縣は、新型コロナウイルスとファッションは如何に向き合っていくべきかという切実な課題に取り組もうとしている。

すでに多くの問題を抱えていたファッション業界にコロナ禍が追い打ちをかけた。それによりファッション業界の今後の見通しは、より不透明なものとなっていった。山縣は、本誌の中で、ファッション史の流れを追いつつ、現在の疲弊しきったファッション業界の未来と希望を必死に模索していこうとしている。寄稿者たちも山縣のこうした想いに共鳴しながら文章を綴っている。

緊急事態宣言が発令され「進めていた仕事の延期や中止の連絡が次々と来るようになった」(本書、147ページ)中、山縣は、「自ら蚕を育て、日々を記録していくこと」(147ページ)を思い立つ。それは、ファッションや衣服の起源にこだわる山縣らしいアイデアの発露であった。山縣は、「ファッションの創造の起源を見つめよう」[山縣・坂部2013: 79]とし、「神々のファッションショー」と題したコレクション(2010年春夏)で「遠い昔、この世界で初めてファッションショーを行ったのは神々だった」[山縣・坂部2013: 78-79]というコンセプトでショーを行う。また2011年10月に開催されたグループ展「感じる服 考える服：東京ファッション現在形」で「あたらしいせかいのちつじょ～動物たちの恩返し」と題した展示を行う。これは「服を展示せず、機織り機で『0円紙幣(zero written note)～』を作っている動物の剝製のインスタレーションで構

成」[山縣・坂部 2013: 89] されていた。この展示のテーマは「ファッションの最も原始的な素材である『布』と、経済の最も基本的な単位である『お金』」[山縣・坂部 2013: 90] であった。先の「神々のファッションショー」が、「ファッションの創造の起源」ということであれば、こちらは、さしずめ「ファッションビジネスの起源」ということになるであろうか。そして今回、山縣は蚕の飼育を通じて「衣服作りの起源」を見つめようとしたのではなかったか。山縣は、この蚕の飼育を行っていく中で、さまざまな気づきを得る。

蚕を日々観察していると、その想像を超えた変化の過程が驚きの連続であると同時に、そこにファッションのヒントが多くあるように思う。小さな蚕が、繭という形状をつくり、そのなかで蛹となる。そして繭を突き破ってカイコ蛾となり外界へ戻ってくる。ひとつの生命の連続であるにも関わらず、これほどまでにメタモルフォーゼしていくことに感情が揺さぶられる。元々はまったく別々の生き物だったものが変態の過程、つまり時間を棲みわけて融合したという説もあるらしい。なんとも不思議な存在である。(147 ページ)

蚕を飼育し、1本の糸に思いをはせることで、本来の衣服作りがどれほど、手間と暇がかかるものだったかを山縣は実体験していく。また、その過程で「絹の道（シルクロード）によって各地にわたった絹からつくられた衣服は、その後ファッションの歴史のなかに様々な装いとして綴られていく」(147 ページ) ことにも思いを巡らす。現在、大量の服が製造され同時に廃棄されているが、こうした状況は、長い人類の歴史から見ても異常なことである。こうした異常事態が今後も続けば、その先に、もはやファッション業界の未

来はないであろう。

本誌に寄稿しているトレンド予測の第一人者、リドヴィッジ・エデルコートも、強い危機感を感じている1人である。彼女は、今日のコロナ禍とファッション業界の今後について以下のように述べている。

コロナウイルスが私たちの良心を象徴しているのではないかと時々思う。もう長い間すでに私たちみんながわかっていたこと。過剰な生産、過剰な移動、強迫的なショッピング、地球汚染をやめなければならないこと。そしていままでのリズムを真剣にスローダウンする必要があるということ。(105 ページ)

エデルコートは、コロナ禍を「私たちの良心」の象徴としてとらえている。彼女は、この文章の中で私たちの心の奥底に存在する漠然とした思いをはっきり言語化していく。この彼女の言葉と山縣による蚕の飼育の実践は、今後のファッション業界の進むべき方向をそれぞれ指し示しているように思われる。つまり今後のファッション業界にとって重要なポイントは、もう一度服作りの原点に立ち返り、過剰となってしまった生産活動を改めていくということになるであろう。そして、それはまさに服の価値を取り戻すということである。大量に製造し、廃棄するという行為は、服がそれまでもたっていたさまざまな意味や象徴性を奪い、ロラン・バルトが『モードの体系』で述べたところの「ときには愛するものであり、ときには愛を受けるものである」[バルト 1972: 334] 衣服の形を破壊しながら、服の価値を低下させていった。それはある意味ファッション業界にとっては自殺行為に等しいものであった。

では具体的に我々は、どのような姿勢で服作りに臨んでいけばよいのであろうか。エデルコートは、「日本という国は先進国のなかでもいままで決してもものづくりのスキルや体

制を完全に失うことはなかった」(105 ページ)と評価し、日本のアパレルが進むべき方向性をつぎのように示している。

そんな日本の、ファッションで期待できるエリアはより小さな規模のデザイナーブランドやアーツ&クラフトアトリエの存在。というのも彼らは小さな分量や単一アイテムを地元のクライアント向けに発信することが可能で、今後ユニークな提案が求められる時代のニーズにとっても合っているのだ。彼らの動き、デザイン、クリエイションは専門店を復活させるかもしれないし、デパートでさえ変わるきっかけを与えるかもしれない。デパートはブランド依存から脱却し、エディターのような振る舞いを求められているのだ。(105 ページ)

エデルコートが述べているように服作りを現在のような我々から遠く離れた存在から、より身近なものとする中で、服の価値を取り戻すことも可能となってくるのではなからうか。山縣の蚕の飼育も服作りを原点から見直す契機となり、それは必ず新たなクリエイションへとつながっていくであろう。

コロナ禍は長期化の様相を呈してきており、彼らが指し示す新たなファッションの世界の景色はまだまだ臆気ではあるが、筆者には、それでもその中にファッションの未来と希望があるように感じられる。

#### <参考文献>

バルト、ロラン 1972『モードの体系——その言語表現による記号学的分析』佐藤信夫訳、みすず書房。  
山縣良和・坂部三樹郎 2013『ファッションは魔法』(アイデアインク 09) 朝日出版社。

前田朗編

『美術家・デザイナーになるまで

——いま語られる青春の造形』

彩流社、2019 年刊  
368 頁、3300 円+税

国際ファッション専門職大学  
河西瑛里子

美術家やデザイナーとはほとんど無縁に過ごしてきた私だが、彼らと交流することがここ数年で急に増えた。ファッション系の大学に就職したということもあるが、2017 年から行っている、日本で魔女を名乗る人々、魔術に携わる人々の中に、踊り、陶芸、アニメーションなど、芸術活動に携わる人々が少なくなかったからである。

その 1 人へのインタビューの中で、印象深かった大学時代の教員として、本書でも取りあげられている、文化人類学者の鍵谷明子の名前が出た。文化人類学的なものの方やフィールドワークの体験が、創作活動を行う人々に影響を与える可能性があるという点は、文化人類学を専攻する私にとっては興味深い事実だった。毎回ゲストとして招いた教員にインタビューをするという、東京造形大学の授業にもとづく本書を読んでいくと、美術やデザインの領域と文化人類学は、それほど隔たっていないように思えてきた。

第 I 部 デザインを生きる、デザインで生きる

第 1 章 波多野哲郎「文化の境界線上で考える」

第 2 章 薄靖彦「デザインマネジメントの思想をつくる」

第 3 章 益田文和「自分らしく生きるためのデザイン」

第 4 章 春日明夫「創作玩具研究とキッズデザインの世界」

第 II 部 布の世界を旅する